

0～1歳の子どもを持つ母親の育児不安と 育児情報に関する一考察

—平成9～10年度「高度情報化社会における新しい子育てネットワーク形成に関する実証的調査研究」より—

中野 洋 恵

< キーワード >

育児不安 育児情報 育児閉塞感 子育て支援 メディアリテラシー

< 要 旨 >

「育児不安」「育児情報」という言葉が注目されるようになってきたのは1980年以降のことである。急激な社会変化の進行とともに、核家族化、少子化、都市化、情報化といったキーワードが注目され、「子育て」の環境も大きく変貌し、母親ひとりに子育てが集中する傾向があらわれたのである。地縁関係、近隣の交流の希薄化は閉鎖的な「密室育児」状況を引き起こし、しかも、母親が社会から取り残されるという不安やいらだちから「孤独と不安の育児」問題が顕在化してきたのである。一方で育児情報、ときには相反する情報が氾濫し、育児不安を加速させてきた。

こうした状況の中で子育て支援が今日的な課題になっている。これからの少子高齢社会、男女共同参画社会に向けて父親の家事・育児参加が求められているが、育児の負担は母親に大きくかかっているのが現状である。

平成9、10年度にかけて文部省科学研究費補助金の交付を受けて「高度情報化社会の子育てネットワークに関する実証的調査研究」を実施した。この中で育児情報に関するヒアリング調査、0～1歳の子どもを持つ母親を対象とした育児意識、生活、育児情報についてのアンケート調査を行った。本稿では乳幼児を持つ母親の意識と必要としている情報についてアンケート調査の結果をもとに考察したい。0～1歳の母親は、子育てを肯定的にとらえている反面、不安感、閉塞感も併せ持っている。子育てに関わる情報の必要性は強いが、とりわけ不安感・閉塞感の高い母親ほど自分自身の情報を求めているということが明らかになった。今後さらに高度化する情報化社会の中で、母親だけに育児を集中させることなく子育て不安を軽減するための情報提供の在り方を考えることが必要である。

1. 課題の所在と調査の概要

(1) 課題の所在

核家族化と都市化の進行とともに、「育児」のもとに母親が一人で乳幼児と一日中向き合う「育児の孤立化」という状況が生みだされた。1980年以降、子育ての負担感、子育てに対する否定的な感情が顕在化し、「育児不安」「育

児ノイローゼ」への関心が高まってきた。母親が子育てに重圧やストレスを感じながら子どもに接することは、子どもの心身の発達に好ましくないことも指摘されている[厚生白書1998 84]。

一方、一人で育児をする母親を対象に子育てに関する情報が次々と生産され、消費され、育児雑誌の発行部数は産まれてくる子どもの数をはるかに上回り、一人の母親

が何冊もの育児雑誌を読んでいるといわれている¹⁾。また、パソコンの普及により育児に関するホームページも増えており、インターネットで「子育て」「育児」をキーワードに検索すると3万件以上ヒットする。子育て、育児情報はまさに花盛りと言った様相を呈している。しかし、情報が増えるとともに相反する情報もでてきて、「あれがいい、これがいいと言われることを全部やっていたらパンクしちゃう。でもやらないといけない母親のような気がする。同じことで正反対の情報もある。子どもってどう育てればいいのか!?」[服部・原田 1997 47]といった子育ての不安をも引き起している。「ニコニコしている赤ちゃんに、優しくすてきなママ、お部屋はきれいに片づけられておまけに献身的なパパまで登場するページは、それこそ入手するのが困難な世界」[大日向 1999 106]という指摘もある。育児雑誌に描かれる架空の世界と現実のギャップが子育てにとっての不安材料となり、育児情報の氾濫が子育て不安を募らせるのではないかと懸念される。

育児不安や育児情報への関心の高まりを反映し、専門家や研究者の間で多方面から調査研究が進められてきた。例えば育児不安の研究は1980年以降着実に積み重ねられており、育児不安の構造化、育児不安尺度の妥当性などの研究、あるいは育児不安を解消するための育児サポート体制のあり方についての提言がなされてきた。育児情報についても、情報の内容分析、増加する情報の矛盾点、母親や専門家への意識調査などが実施されてきた。ところが育児不安、育児情報それぞれの研究はあるが、育児不安と育児情報との関係については必ずしも明らかにされているわけではない。

高度情報化社会の到来とともに、情報の質とその提供の仕方により育児不安を軽減させることができるのかを考えることが課題になってきた。そこで、本稿では、情報化社会の中で、どのような情報提供のあり方が育児不安の解消になるかについて、乳幼児を持つ母親の必要としている情報と育児不安との関連の調査結果を通して考察してみたい。

(2) 調査の概要

① 調査対象者

調査対象は東京都とその近郊に居住する0～1歳の乳幼児をもつ母親1075名である。この年齢の母親を対象とした理由は、0～1歳は保育園、幼稚園に通園する子どもが少ないので、子どもと母親がふたりで向き合う時間が長く、育児による不安感が強いのではないかと考えたか

らである。これまでの研究からも育児不安は低年齢の子どもを持つ母親に多く発生すると考えられている。

対象者の属性は以下のとおりである。

子どもの数

1人(63.1%) 2人(30.0%) 3人以上(6.9%)

子ども(第1子)の年齢

0歳(39.9%) 1歳(25.6%) 2歳以上(34.5%)

子ども(第1子)の性別

女(49.8%) 男(50.2%)

母親の年齢

25歳未満(7.6%) 25～29歳(31.8%)

30～34歳(43.1%) 35歳以上(17.5%)

母親の職業

家事・育児に専念(73.1%) 育児休業中(11.2%)

フルタイムの勤め人(7.5%) パートタイムの勤め人

(0.5%) 自営業(3.2%)

② 調査地と調査方法

調査地は東京都大田区、世田谷区、練馬区、小金井市、国分寺市、浦和市、所沢市、深谷市で保健所、保健センターで実施されている乳幼児検診に来所した保護者に調査票を配布し、後日郵送による回収を行った。配布票数2880、回収数1075(回収率37.3%)である。

③ 調査内容

調査内容は子育て意識、子育てについての充実感・不安感、子どもとの行動、夫の家事育児参加、必要とする情報と情報源、つきあい、子育ての支援者、サークル活動、利用するメディア、メディアへの参加等多岐にわたるが、本稿では子育てについての充実感・不安感、必要とする情報と情報源について分析することにする。

2. 必要とされる育児情報

(1) 育児情報の内容

子育て情報が氾濫しているといわれるが、実際に子育て中の母親はどのような情報を必要としているのだろうか。ここではそれぞれの情報の必要性について「とても必要」「少し必要」「あまり必要でない」「全く必要でない」の四つの選択肢による回答を得た。表1は「とても必要」「少し必要」「あまり必要でない」「全く必要でない」にそれぞれ4点、3点、2点、1点の得点をつけその平均点を算出したものであり、この数字が高いほど必要性が高い情報であることを示している。最も重視されているのは「子どもの病気・けが」「子どもの病院」「行政からのお知らせ」

など子どもの身体、健康に関するものである。行政のお知らせが重視されているのも乳幼児検診、予防接種などの情報があるためではないかと考えられる。

2番目に重視されているのは「親子でのお出かけ」「保育園・幼稚園」「子どもの遊び場」「子ども向けの食事」など子どもの生活のための情報で、3番目が「自分自身の健康」「自分自身の趣味・学習」「自分自身の仕事」といった母親自身のための情報である。つまり、子どもと自分ではまず子どもの情報を、子どもに関する情報では生活情報よりも身体に関わる情報を重視していることが明らかである。

この重視度は母親の属性、特に「母親の職業の有無」と「子どもの数」により差がみられた。有意差がみられた項目のみに注目すると、働いている母親は「自分自身の仕事」「保育園・幼稚園」「一時保育・ベビーシッター」など育児と仕事の両立のための情報を必要としており、逆に専業主婦は「子どもに関する情報」「子どもの遊び場」「子ども向けの食事」を必要としている。同様に、子どもの数別にみると子どもが一人の母親は「子どもの病気・けが」「子どもの病院」「行政からのお知らせ」「保育園・幼稚園」「子ども向けの食事」「子どもの発達」「子どものしつけ」「子育てサークル」「父親の育児参加」など多くの情報を二人以上の子どもを持つ持つ母親よりも必要としている。一人目の子どもの慣れない育児にわからないことが多く、助

けを求めている母親の姿が浮かびあがる。初めて親になった人、初めて子どもを育てる人へのサポートが必要なことを示している。母親の状況を考えた情報提供のあり方、例えばワーキングマザーのための情報、一人目の子どもを持った親への情報など、属性とニーズに応じた情報提供のあり方が有効であると考えられる。

(2) 育児情報の入手先

ではこれらの情報をどこから得ているのだろうか。本調査では情報源として「テレビ・ラジオ・ビデオ」「書籍・雑誌・新聞などの印刷物」「病院・保健所・保育園など」「家族」「友人・知人」「職場の人」「パソコン通信・インターネット」「電話相談」の中から3つまで選択する複数回答の形式をとった。

情報源として最も多かったのが「印刷物」で37.9%、続いて「友人」25.9%、「病院・保健所・保育園など」12.3%となっており、全体としては印刷物から情報を得ている母親が多い。この情報源を情報内容ごとにメディア、人、その他に分類したのが図1である。情報の内容によってその情報源が異なっていることが明らかになった。「テレビ・ラジオ・ビデオ」「書籍・雑誌・新聞などの印刷物」「パソコン通信・インターネット」のメディアが主となっているもの、「家族」「友人・知人」「職場の人」の人が主となっているもの、人とメディアが同程

表1 育児情報の必要度

順位	子育てに関する情報	必要度	母親の職業の有無	子どもの数
1	子どもの病気けが	3.69		* 1人>2人以上
2	子どもの病院	3.64		* 1人>2人以上
3	行政からのお知らせ	3.54		* 1人>2人以上
4	子どもに関する情報	3.47	* 有<無	* 1人>2人以上
5	親子でのお出かけ	3.46		
6	保育園・幼稚園	3.43	* 有>無	* 1人>2人以上
7	子どもの遊び場	3.42	* 有<無	
8	子ども向けの食事	3.33	* 有<無	* 1人>2人以上
9	子どもの発達	3.32		* 1人>2人以上
10	子どものしつけ	3.25		* 1人>2人以上
11	自分自身の健康	3.02		
12	子育てイベント	3.00	* 有<無	* 1人>2人以上
13	自分自身の趣味・学習	2.86		
14	自分自身の仕事	2.78	* 有>無	
15	一時保育、ベビーシッター	2.78	* 有>無	
16	子育てサークル	2.72	* 有<無	* 1人>2人以上
17	教育・お稽古	2.65		
18	地域活動	2.61		
19	父親の育児参加	2.59		* 1人>2人以上

* p<.05で有意差の見られたもの

度のものの3パターンに分類すると、メディアから情報を得ているのは「子ども向けの食事」「教育、お稽古」「親子でのお出かけ」「自分自身の健康」「自分自身の仕事」「自分自身の趣味学習」「一時保育、ベビーシッター」「父親の育児参加」「子育てサークル」「子育てイベント」「行政からのお知らせ」

「地域活動」であり、メディアから受け取る情報の多さが確認される結果となった。しかし「子どもの病院」「子どもの遊び場」「保育園・幼稚園」情報は家族、友人、知人、職場の人といった「人」から得ていることが多い。地域での生活に密着した情報は口コミの持つ意味が大きい。

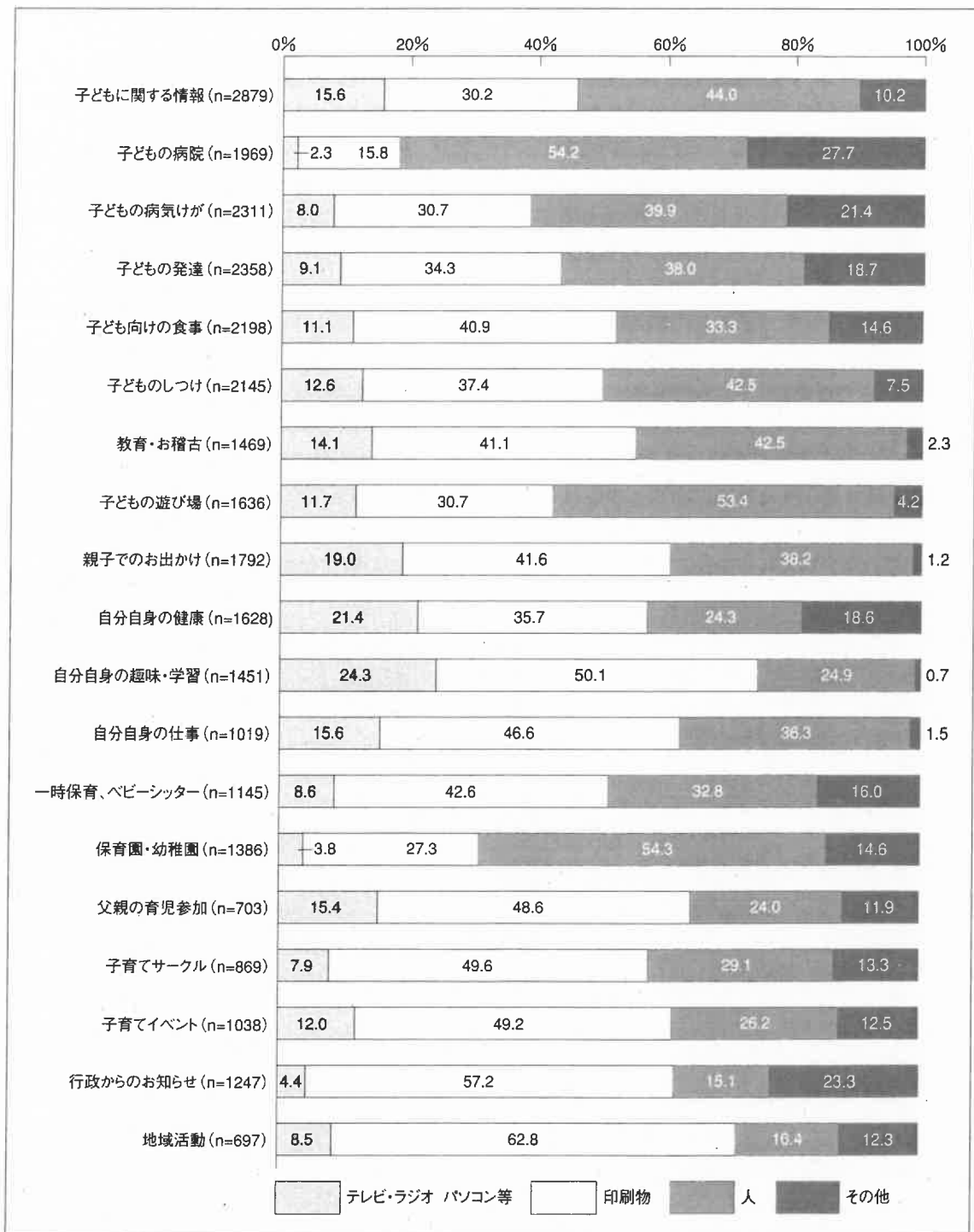


図1 情報の入手先

3. 育児不安と育児情報

(1) 育児不安

情報化の進行の中で、育児不安を和らげるための情報提供のあり方を考える上で、まず育児不安が何かというこ

とを明らかにしておこう。育児不安とは既述のように1980年代から関心が持たれるようになった言葉である。専門家や行政担当者の関心は高く、また広く一般にも使われてきたが、必ずしも確定した概念があるわけではなく、多義的に使用されることが多かった。しかし、1981～88年の牧

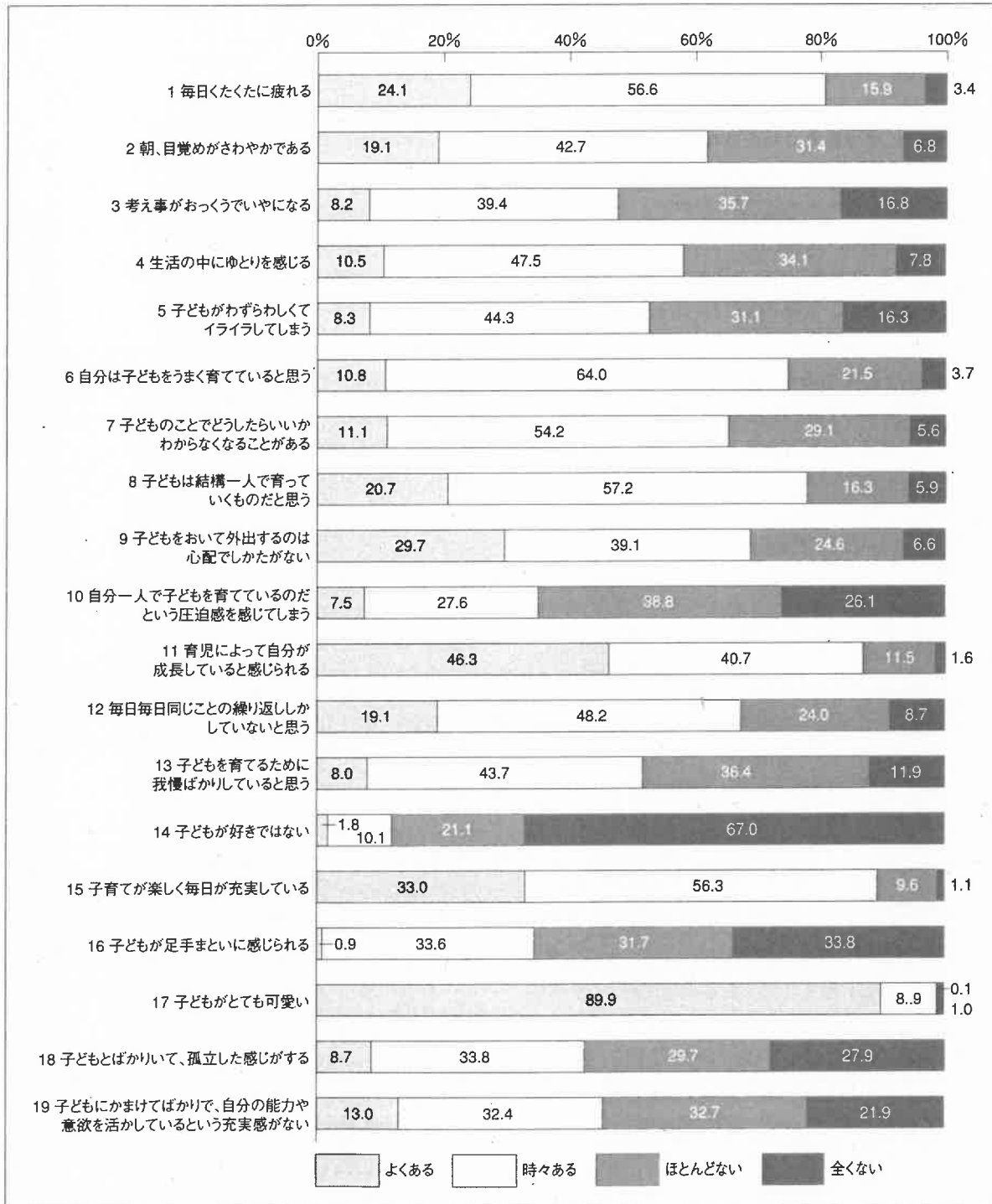


図1 母親の育児不安

野の研究、あるいは1993～95年の愛育研究所のプロジェクト研究で育児不安の構造が明らかにされている。

本稿では育児不安を「育児を担当している人が子どもの状態や育児のやり方などについて感じる漠然とした恐れを含む不安の感情」[新社会学事典 1993 36]と考え、牧野の育児不安尺度に修正を加えた岩田の育児不安尺度[岩田 1995 197-198]によって育児不安をとらえることにした。調査項目は肯定的、否定的あわせて19項目であり、それぞれの質問について「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「全くない」の四つの選択肢で回答を求めた。全体としてみると、子育てに関する肯定的な感情は「よくある」「時々ある」を合わせると過半数を超え、育児に対して肯定的であることが明らかである。特に「子どもがとてもかわいい」(99.8%)、「子育てが楽しく毎日が充実している」(89.3%)、「育児によって自分が成長していると感じられる」(87.0%)など子育てを楽しんでいる様子が伝わってくる。

しかし、一方で否定的な感情も存在する。否定的な項目で「よくある」「時々ある」の合計が半数を超えるのは「毎日ぐたくたに疲れる」(80.7%)、「子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない」(68.8%)、「毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う」(67.3%)、「子どものことでどうしたらいいかわからなくなることがある」(65.3%)、「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」(52.6%)、「子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う」(51.7%)である(図2参照)。

このように母親が育児に対して持つ感情は複雑である。育児不安が問題として語られるとき「子ども嫌い」「育児嫌い」の母親が増えているという指摘がなされることがある。確かに子どもに腹が立ったり育児がいやになることはあっても、同時に子どもはかわいいし、子育ては楽しい、それでも疲れ切ったりイライラしたり、充実感が得られなかったりする。つまり、育児には相反する感情が共存していると考えられるのである。

(2) 育児不安の因子分析

このような複雑な子育てに関する意識はどのような構造を持っているのだろうか。育児不安の構造を明確にするために、得られたデータについて因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った結果、固有値が1以上の3つの因子が抽出された。得点が高いほど育児不安が高くなるように得点方向を調整し、否定的な項目については得点をコンバートした。第一因子は因子負荷量の高い順に「子どもとばかりいて孤立した感じがする」「子どもにかまけてばかりで、

自分の能力や意欲を活かしているという充実感がない」「子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う」「毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う」「自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」の項目が推定される。育児のために孤立し、子どもの犠牲になってやりたいこともできず充実していない状態を表す因子であり、ここでは「育児閉塞感」因子とする。

第2因子は「生活の中にゆとりを感じない」「毎日ぐたくたに疲れる」「朝目覚めがさわやかでない」「子どものことでどうしたらいいかわからなくなる」「考え事がおっくうでいやになる」「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」「自分は子どもをうまく育てていると思(わない)」が推定され、身体的、精神的に疲れている状態を表す因子であり、これを「育児疲労感」因子とする。

第3因子は「育児によって自分が成長していると感じられない」「子育てが楽しく(なく)毎日が充実していない」「子どもがかわいく(ない)」が推定され、子どもや子育てに対するストレス状態を表しており、ここでは「育児回避感」因子とする。このように、育児不安は「育児閉塞感」「育児疲労感」「育児回避感」の3つの因子から構成されているといえよう(表2)。

表2 因子分析結果

第1因子「育児閉塞感」

(固有値5.3025 説明率28.0%)

項目	負荷量
子どもとばかりいて、孤立した感じがする	.77706
子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を活かしているという充実感がない	.77679
子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う	.64622
毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う	.61232
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	.56111

第2因子「育児疲労感」

(固有値1.5480 説明率8.1%)

項目	負荷量
生活の中にゆとりを感じない	.70473
毎日ぐたくたに疲れる	.68291
朝、目覚めがさわやかでない	.65086
子どものことでどうしたらいいかわからなくなることがある	.55769
考え事がおっくうでいやになる	.54285
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	.53299
自分は子どもをうまく育てていると思わない	.51759

第3因子「育児回避感」

(固有値1.4505 説明率7.6%)

項目	負荷量
育児によって自分が成長していると感じられない	.64972
子育てが楽しくなく毎日が充実していない	.64532
子どもが可愛くない	.63218

(3) 育児不安因子と育児情報のニーズ

因子分析から得られた3因子のうち説明率の最も高い「育児閉塞感」について閉塞感の強い母親はそうでない母親の間に情報の必要度に違いがあるかをみてみよう。育児閉塞感得点は図3のように6点から23点に分布している。これを得点が6～11点の育児閉塞感の低位群(25.8%)、12～15点の中位群(46.7%)、16～23点の高位群(27.5%)に分け、それぞれの情報の必要性とクロス集計を行った。クロス集計の結果、危険率0.05以下で有意差がみられたものは「子どものしつけに関する情報」「教育、お稽古毎に関する情報」「自分自身の趣味や学習活動に関する情報」「自分自身の職業、仕事に関する情報」「一時保育やベビーシッターに関する情報」「保育園、幼稚園に関する情報」「父親の育児参加に関する情報」「子育てサークルに関する情報」「子育てイベントに関する情報」である。(表3)

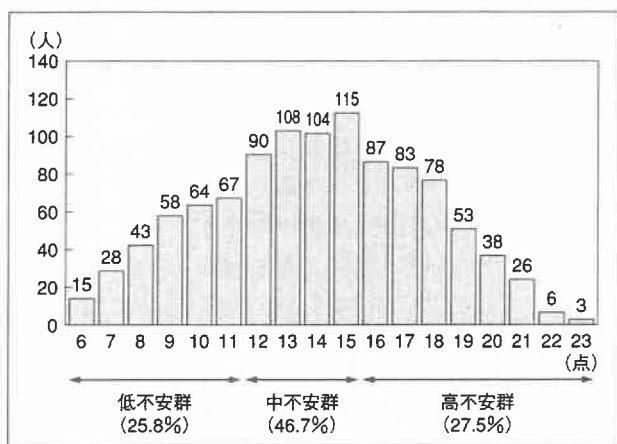


図3 育児の閉塞感因子得点ヒストグラム

どの情報も育児の閉塞感の強い母親ほど「とても必要」と答えている。育児の閉塞感を感じている母親が必要としている情報の特徴として次の2点が考えられ。一つは子どもに関する情報だけでなく、趣味や学習活動、職業や仕事といった母親自身に関する情報を必要としているという点である。もう一つは、子育てサークルや子育てイベント、一時保育・ベビーシッター、父親の育児参加など子育てを母親ひとりだけではなく周りの人と担っていこうとする情報、子育てを広げていく情報を必要としていることである。

これまで子育てといえば母親の役割であり、子どものためにはやりたいことを諦めたり、我慢したりするのは当たり前で、子どものための自己犠牲は美談として取り上げてきた。母親は「子どもと自分とどちらが大切か」「子

表3 育児閉塞感×必要とする情報

子どものしつけに関する情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	33.8	47.4	18.4	0.4
中位群	36.7	50.3	12.8	0.2
高位群	46.9	43.1	9.7	0.3
教育・お稽古ごとに関する情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	11.0	39.3	40.1	9.6
中位群	9.5	50.1	36.6	4.1
高位群	14.8	53.4	27.6	4.1
自分自身の趣味や学習活動に関する情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	20.2	39.3	29.4	11.0
中位群	23.7	45.3	25.3	5.7
高位群	27.9	50.0	17.9	4.1
自分自身の仕事、職業に関する情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	19.9	28.4	31.4	20.3
中位群	26.9	35.2	27.9	9.9
高位群	37.2	35.2	23.1	4.5
一時保育やベビーシッターに関する情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	23.5	24.6	27.2	24.6
中位群	28.0	32.5	26.4	13.2
高位群	43.4	32.1	43.4	27.5
保育園、幼稚園に関する情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	54.4	28.3	13.6	3.7
中位群	55.5	33.2	8.7	2.6
高位群	66.2	23.8	7.2	2.8
父親の育児参加に関する情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	13.7	27.3	35.4	23.6
中位群	15.8	36.4	37.2	10.5
高位群	24.2	45.0	24.2	6.6
子育てサークルに関する情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	15.4	33.1	36.8	14.7
中位群	21.1	39.4	31.1	8.3
高位群	28.6	39.7	26.2	5.5
子育てに関するイベント情報				
	とても必要	少し必要	あまり必要でない	全く必要でない
低位群	28.0	39.1	25.1	7.7
中位群	29.0	45.2	20.9	4.9
高位群	37.2	45.5	14.1	3.1

数字はそれぞれの%を示す

もは大きくなるのだからせめて子どもが小さいうちはしばらく子どものことだけを考えればいい」と自問自答を繰り返してきた。つまり子どもか自分かという二項対立を軸に考えられてきたのである。しかし、今回の調査から母親自身と子どもとは二項対立のとしてとらえられなくなって

いることがうかがえる。子育てに閉塞感を感じる母親も子どもが嫌いなのではなく、子育ても楽しいのである。ヒアリングである母親は「子どもはかわいいしとても大事、でも自分も大事」であると語っており、子ども対自分という二項対立ではなく多元的にとらえることの重要性を示している。

一般に子育て情報といえば、子どもの成長、子どもの健康、育児方法、子どもの世話の仕方といったものが考えられている。もちろんそれが必要不可欠なことはいまでもないが、母親の育児の不安感をやわらげるには、子どもに関する情報を充実させるだけでは解決しない。育児不安の中で大きな意味を持つ母親の閉塞感を軽減する方向という視点から見直す必要がある。そのためには育児をしている母親自身の情報を充実させ、さらに子育ては母親だけが背負うものではなく、父親や家族以外の人などたくさんの人でいわば社会で担っていくのだと明示していくことが必要なのではないだろうか。

4. 育児不安の軽減と子育て情報提供のあり方

現在、少子高齢社会に向けて子育て支援は重要な政策課題の一つとなり、その中で子どもを持つ母親への情報提供のありかたについて模索され始めている。行政が子育てのための情報誌を作ったり子育て支援センターで情報提供をしたりする試みもなされている。今後の子育て支援を考える上で、今回の調査から子育て情報の質とその提供のあり方について次のような点を指摘できる。

まず第1に画一的な子育て情報は個々のニーズに対応できないということである。当然のことながら母親が働いているかそうでないか、一人目の子どもか二人以上かによって必要とされる情報は異なる。情報提供を考える上で、どのような受け手を想定するか、個別のニーズにどのように対応するかということへの配慮が必要であろう。また情報というと雑誌、広報誌等の紙媒体、インターネットなど充実が課題となりがちだが、一方で家族、友人、近所の知り合いから得ている情報も重要である。例えば、子どもを連れていく病院情報として知りたいことは、医者の数や看護婦の数、建物の大きさベッド数といったハード面よりも、医者や看護婦がどんな対応をしてくれたか、子どもとの相性はどうかといった体験に基づく質的なものである。こうした地域の情報は対人的な直接的交流によって提供されることにより、説得性を持ち信頼できるものになる。

第2は子育て情報は一般的に子どもに関するものと考

えられがちだが、子育て不安を軽減させていくことを視野に入れば、母親自身の関心事の情報が必要だという点である。そして育児を母親だけに閉じこめずに、母親同士のネットワークにより、子育てを共有するとともに、父親、親族、地域のヒト共に子育てをするという明確なメッセージを多様な形で発信することが必要である。

これまでのように総論的で、子どもだけを対象にした情報やあるべき母親像を提示した規範的な情報に終始するのではなく、個別で、多様な情報を提供するとともに、子育ての担い手を母親だけにとどめずに父親、地域さらには社会全体で担うというメッセージを多様な形で発信していくことが望まれる。情報化社会の進展とともに、個別で多様な情報提供と多様な層に向けて発信していくことが可能になっており、実際に新しい情報の提供の動きがみられるようになってきている。今回の調査のヒアリングの中から二つの新しい動きについて紹介しよう。

その一つは子どもを持つ母親が作る情報誌が増加しているという動きである。情報誌はたくさんあってもほしい情報がない。それならば自分たちで作ろうと1990年代ははじめころ子どもを持つ母親グループの作る情報誌が登場した。母親グループの作る情報誌は年毎に増加し現在、全国で手作りのものから書店で販売されるものまで様々な形で展開している。こうした情報提供をしているグループに対するヒアリングからも「子育て中のお母さんたちが、信頼できる子育ての情報をニーズとし、自分の役に立つような情報をみずからの手と足を使って集めたものを、同じニーズをもつお母さんたちに提供した。同じ体験者であるとか、身近なものであるとか編集者の顔がみえるような双方向性のものであるといったことが特徴になっており、その結果、地域のお母さんからも信頼されるものになっている」という声が聞かれた。地域に密着した個別の情報を双方向性で提供している²⁾。

もう一つは、インターネットを使った情報のネットワーク化の動きである。多摩市の社会教育関係者の作るグループは、コンピューターネットワークを利用し「みんなで子育てメーリングリスト」を運営している。コンピューターネットワークの導入によって時間と場所にとらわれないコミュニケーションが可能になり、メーリングリストを通じて同じような思いをかかえたメンバーと知り合い「ひとりじゃない安心感」を得るという成果が上げられている。メール上での意見交換でかつて質問したメンバーが新しく入ったメンバーの同じような悩みに答えたり、アドバイスする関係ができつつある。メーリングリストが学び合い、励まし

合いの場になっているのといわれる。インターネットにより、時間と空間をこえたネットワーク化をはかり、子育ての悩みを共有するとともに、双方向性の交流を可能にしている³⁾。この動きをみると、これからの情報社会にむけて自分が必要な子育て情報を、どのように集めていくか、情報にアクセスする力や情報をよみとく能力、メディアリテラシーが必要になると考えられる。

これまで、子どもを育てている母親は、子育て情報の提供を受ける受信者という位置づけであったが、双方向性メディアによって単に情報の受信者だけではなく発信者となることが可能になった。どのように情報発信をするか、どのように自分を表現し、発信していくかということがこれからの課題になる。このことは、子育て中の母親がメディアリテラシーを身につけるためのサポートのあり方とも関連してくる。育児情報を自分の目で選び自らも発信し

ていくというメディアリテラシーの育成が、結果として育児に関する不安を軽減するモメントになる可能性を持っているといえるのではないだろうか。

本研究ノートは平成9～10年度文部省科学研究費補助金を得て実施した「高度情報化社会における新しい子育てネットワーク形成に関する実証的調査研究」の一部を報告したものである。

研究組織のメンバーは以下のとおりである。

研究代表者	中野 洋恵	国立婦人教育会館
研究分担者	伊藤真知子	国立婦人教育会館
研究分担者	中山 実	東京工業大学
研究分担者	中澤 智恵	東京学芸大学

<註>

1) 書店で販売されている0、1歳児を対象とした育児雑誌(10万部以上発行されているもの)

No.	タイトル	発刊年	発行回数	版型	ページ数	版型	備考
1	ミキハウス・ラブ	1996	月刊	A4変形版	174	390	0～6歳児を持つ主婦層向け子育て応援誌
2	ひよこクラブ	1993	月刊	A4変形版	340	600	赤ちゃんが産まれた日から読む育児情報誌
3	ベビー用品ガイド	1987	年間要覧	A4変形版	280	1200	ベビーのためのグッズ選びのガイドブック
4	すくすく赤ちゃん	1967	月刊	AB版	128	560	NHK教育テレビテキスト妊娠、出産から3、4歳児
5	ベビーエイジ	1969	月刊	A4変形版	220	630	日本で最初に発刊された育児としつけの専門誌
6	たまひよこクラブ	1996	月刊	A4変形版	220	600	1～3歳児を持つ母親の生活&子育て情報誌
7	わたしの赤ちゃん	1973	月刊	A4変形版	260	630	0～2歳の赤ちゃんを持つパパとママを応援する情報誌
8	プチタンファン	1981	隔月刊	A4変形版	176	650	1～4歳の子どもを持つ母親のための子育て情報誌
9	手づくりママキディ	1989	隔月刊	A4変形版	128	920	1～7歳までの子どもや親の手づくりファッションマガジン

雑誌新聞総かたるぐ'99年版より作成

2) 全国各地で地域の子育て情報誌を編集している母親グループが「ママミサミ」というネットワークを作り、子育てを基盤にして少子化問題、育児不安、女性センターのあり方、遊び場などをテーマに95年以降毎年編集者会議ママミサミを実施している。1999年のテーマは「東京発(マスメディア)の情報はもういらない!? ママ@メディアが子育て情報をリードする」。

3) 「東京都教育庁生涯学習部 平成10年度社会教育研究奨励報告書[1]コンピューターネットワークを利用した家庭教育振興及び子育て支援への事業展開についてII ―電子メールから地域ネットワーク―」の中で「みんなで子育てネットワーク」のホームページとメーリングリスト開設の運営の経過と現状についての詳細が報告されている。

<参考・引用文献>

- 石川結貴 1999『ブレイク・ウィフ』扶桑社
- 岩田美香 1995「育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク」『北海道大学教育学部紀要』第68号
- SCCライブラリーズ制作グループ 1999『子育てはなまるホームページベスト100』株式会社SCC
- 大日向雅美 1999『子育てと出会うとき』NHKブックス
- 柿沼美紀 1995「日米育児雑誌投書の比較から見た母親の育児態度」『母子研究』No.16 社会福祉法人真生会 社会福祉研究所
- 榎原洋一 1995「育児情報の質の検討」『小児保健研究』54-3 日本小児保険協会
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子他 1993「育児不安に関する基礎的研究」『日本総合愛育研究所紀要』30: pp27-39
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子他 1995「育児不安に関する臨床的研究II」『日本総合愛育研究所紀要』32: pp29-47
- 川井尚・庄司順一 1995「<育児不安>これまでとこれから」『子ども家庭福祉情報』10 日本総合愛育研究所
- 厚生省 1998『厚生白書(平成10年版)』ぎょうせい
- 斉藤幸子 1995「育児情報と親のニーズ」『子ども家庭福祉情報』10 日本総合愛育研究所
- 佐々木保行・高野陽・大日向雅美他 1982『育児ノイローゼ』有斐閣
- 佐々木正美 1996「子育て不安と児童虐待への援助」『母子保健情報』33: pp29-33
- 佐藤紀子 1996「育児不安と子育て」『母子保健情報』34: pp27-33
- 杉山由美子 1998『バギー・ママの明るい憂鬱』青木書店
- 鈴木久美子 1998「インターネットを使った社会教育実践の面白さと可能性(2)」『月刊社会教育』12月号: pp82-89
- 恒吉僚子・S.ブーコック 1997『育児の国際比較 子どもと社会と親たち』NHKブックス
- 服部祥子・原田正文 1991『乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点』名古屋大学出版会
- 服部祥子・原田正文 1997『みんなで子育てQ&A』農山漁村文化協会
- 牧野カツコ 1981「育児における<不安>について」『家庭教育研究所紀要』2: pp41-51
- 牧野カツコ 1982「乳幼児を持つ母親の生活と<育児不安>」『家庭教育研究所紀要』3: pp35-56
- 牧野カツコ 1983「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要』4: pp 67-76
- 牧野カツコ・中西雪夫 1985「乳幼児を持つ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連」『家庭教育研究所紀要』6: pp11-24
- 牧野カツコ 1987「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』9: pp1-13
- 牧野カツコ 1988「<育児不安>の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』10: pp23-31
- 森岡清美・塩原勉・本間康平編集代表 1993『新社会学事典』有斐閣

(なかの・ひろえ 国立婦人教育会館事業課主任研究官)